

俺たちはエースを王にする

神崎皇希

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仲のいい3人組が地震で崩落するビルの下敷きに、そして変わる風景白い空間で力をもらい、ワンピースの世界へと旅立つ。

主人公は強めですが、ある超強化される原作キャラがめっちゃ強いので、主人公最強ではないです。

目次

少女助けて白い空間、心読んでもらえるって楽だね	1
いきなりの窮地	7

少女助けて白い空間、心読んでもらえるって楽だね

「キーンコーンカーンコーン」

校内に生徒たちが待ち遠しかった音が響く、この音を聞きそれぞれがそれぞれの行動に出る。授業の体制で固まってしまった体をほぐすために体を伸ばす者、すぐに帰りの準備をして教室を出ていく者、友人のところに行きこの後の予定を話し合う者、そんな中で荷物を持って欠伸を噛み殺しながらこちらへ向かってくる1人の青年の姿がある。

「ふわぁ、文月早くいいコーゼ」

この青年の名前は銅前 勝利、俺の唯一の友人で親友だ。

俺の名前は幸草 文月、7月生まれだから文月と安易な付け方をされた名前だが、結構気に入っている。

「…コク」

いつも通り返事をし勝利と揃って歩き出す、教室の後ろのドアをぐり長い廊下を歩く、人気者の勝利は色んな人と挨拶を交わしている。

下駄箱で靴を履き替え昇降口をぐり正門を抜ける。そしたらすぐに左へ向かう、すぐ目の前には大きな中学校がある。

この中学校はうちの高校と中高一貫の学校で妹が通っている。俺と勝利はこの後の用事のため妹を迎えにきたのだ。

少し歩き中学校の正門前にて妹を待つ、少しすると友人達と遊びながら出てくる妹の姿が見えた。こちらに気づいた妹が手を振ってくる。それに対して手を振り返すと妹は友人達との別れを済ませこちらに向かって走ってくる。

「お待たせ！お兄ちゃん！勝利さん！」

「おう！おかえり卯月」

幸草 卯月、それが妹の名前だ。妹の名前も4月生まれだからという理由で付けられた、本人は気に入っているらしい。

「…コク」

卯月に対し勝利、俺共に返事をする。俺たちの返事を書き卯月はさ

らに笑顔になり俺と勝利の間に入る。

今から俺たちが向かうのはネットカフェだ、ここ最近では3人でネットゲームをすることにはまっていて、お互いの家にながらもできるのだが、やはり一緒にいながらやる方が楽しいのだ。

そしてこのネットカフェと一緒にゲームをできる時間は1週間のうち水曜日の1日しかない、その理由は俺が通っている格闘技道場の休みが水曜日しかないからだ。

そんな週1しかない楽しみがもうすぐ迫っているとすれば、自然と3人共足取りが軽くなる。

ネットカフェに向かう途中にある本屋でワンピースの新刊を卯月が見つけた、3人ともワンピースが好きなので本屋に寄ることになった。

ネットカフェは予約をしてあるので少しくらい遅くなくても何も心配はない。

無事ワンピースの最新刊を買い本屋を出た時に地震が起きる。

今まで生きてきた中で1番強い地震だ、地面が大きく揺れ建物にはヒビが入り始めた。俺はとっさに卯月、勝利をつれ止めてあった大型トラックの下に2人を逃す、俺も入ろうとした時親とはぐれたのか小さな女の子が1人泣いていた。周りの状況を確認し今すぐに倒れそうな建物がないことが確認できたので俺は助けに走った、だがここで予想外のことが起きた。

また地震が起きたのだ。さっきの地震よりは弱いかもしれないがさっきの大地震で半壊だった建物が耐えきれなくなるほど弱くはなく、建物が次々と崩れ始める。俺は小さな子の所に到着し抱き上げ、この子が入れる安全な場所を探すがどこにもない。

そして運の悪い所に大きな瓦礫が俺の所へと落ちてくる。この場で俺が抱いていてはこの子は絶対に助からないと考え子供を落ちてくる瓦礫の範囲の外へ投げる。

子供は空中で呆然と俺を見ていた、俺は慰めるつもりで笑顔を見せる。そんな俺に瓦礫の陰がさす、最後にまたあいつらの顔が見たい、その思いから勝利と卯月を入れたトラックの方を見る、そこにはこっ

ち向かって走る2人の姿がある。俺は驚きながらもどこか嬉しかった。瓦礫はそこで地面に落ちる、砂煙がなくなるとそれまでいた3人の姿は瓦礫の下へとうまっていた。

「…?」

俺は瓦礫の下に潰れたはずだが?目を覚まし周りを見ると真っ白な部屋にいた。俺の横には卯月と勝利も眠っている、2人を揺すつて起こすと勝利は目を開け周りを見たらすぐに起き、驚いていた。

卯月は目を擦りながらゆっくりと体制を起こす、欠伸までしている。

「おい文月、ここどこだかわかるか?」

「フルフル」

首を横に振って返事をする、俺の返事を見た勝利は「そおーかあー」と母音が残るほど言葉を伸ばしどこか察しているようだ。

卯月はいま意識がはつきりしたのか「ここ!どこ!」とテンション高く周りを見ている。

「そんなに慌てないでください、卯月さん」

そこに俺の声でも勝利の声でもましてや卯月の声でもない声が響く。

そこには3体6枚の天使の翼を生やした天使?が飛んでいた。頭の上には真っ白な輪があり髪はアシメで右目が隠れている。

「ここはどこなんだ?」

俺たちを代表して勝利が天使さん?に問いかける。

「まずは文月さんの疑問に答えましょうか、私は天使で間違いないですよ」

「!?!」

これは驚いた人の心が読めるのか、勝利と卯月も驚いている。だがこの驚きは違う意味だらうな。

「すごい!私と勝利さん以外にもお兄ちゃんの気持ちわかる人なんて

初めてだよ！やったねお兄ちゃん!!」

卯月はテンションが上がり「イエーイ」と俺にハイタッチを求めてくる。俺も笑顔でハイタッチを返す、卯月はとても嬉しそうだ。

「それでここは？」

勝利が話を戻すぞと一言添えてから先ほどと同じ問いかけをする。

「ここは天界ですよ」

「なんで俺らがここに？」

「死んでしまったので転生させてあげようかと思ひまして」

「なんで俺らなんだ？」

「気まぐれです！」

首を傾げながら笑顔で言う天使さん、最後のところは少しきになるがそれよりもどこに転生するのだろうか。

「いい質問ですね文月さん、ワンピースの世界に行ってもらいます」

「なんでまたワンピースの世界に？」

「あなた方がワンピースが好きだからですよ」

相変わらず笑顔を崩さない天使さん、逆な不気味になってきた。

「それでは転生特典を3個お選びください」

「特典なんてくれるのか？」

「はい、こちら世界の間ではあの世界で生きていけないので、身体能力などは特典ではなくワンピースの世界に合わせますので」

「そーゆーことですか、わかりました」

「少し時間をください」

勝利が天使さんに断りを入れてから俺たちに話を振る。

「とりあえずどーする？おれはもう決めたぞ？」

「コクコク」

「私もすぐにきまつたよ！」

みんな決まっていたので勝利から天使さんに伝える。

「俺の特典はルフィと同じ時期にダダンの所へ行くのと、あと覇気の才能、そして俺の考えた悪魔の実でキギキギの実のロギア系樹木人間でお願いします！あ、悪魔の実を手に入れる時は俺が覇気や身体能力の体術だけで中将を圧倒できるくらいになったら欲しいです。」

「わかりました」

「次は私！私の考えた悪魔の実でレジエリジエの実パラミシア系の再生能力で！私はすぐに悪魔の実が欲しいです！あとモビーディック号くらの大きさで3人で動かせる船！あとはー遠くにいってもお兄ちゃんと勝利さんとお話ししたい！」

「わかりました」

2人ともオリジナルの実とは、俺も同じことを考えていた。やはり一緒にいる時間が長いと似るんだなと少し驚く。

ちなみに俺が欲しい特典はオリジナル悪魔の実トラトラの実幻獣種モデル白虎で手に入れる条件は勝利と同じで、あと修行できる環境と師匠が欲しいな。

「文月さんのもわかりました」

やはり思っているだけで伝わるのは便利だな。

「たしかにこの力は便利だよね」

天使さんも俺と同意見のようだ。

「あ、それと転生する場所だけど勝利さんはルフィがダダンの家に預けられる時に山の中で倒れているところを助けられるってことにするね。これは記憶喪失とでも言ってくれれば養ってもらえるよ、歳はエースと同じ歳まで下げておくね」

「わかりました」

「文月さんと卯月さんは風車村から見えるかなーくらいの所に無人島作るからそこで修行してね、師匠もそこに現れるようにしておくよ。」

「わかりましたー！」

「コク」

俺と卯月も返事をし転生の準備が整った。

てか、天使さんの喋り方最後変わってたな。

「じゃあ楽しんできてください」

天使の言葉と共に景色が変わった。

~~~~~文月達が去ったあとの天界~~~~~

~~~~~


「ふう転生完了しましたと」

「まさか君が私の駒に対抗する駒を送り込むとはな」

気づくとか後ろには3対6枚の黒い悪魔のような翼を生やした者がいる。

「ここには来ないでくれよ悪神」

「かたいこと言うなよ神王」

まるで旧知の仲のように話す2人、だが決してお互いに隙は見せていなかった。

「お前も駒を送ったことであの世界はさらにぐちやぐちやかもな」

「きつと君の駒よりはましき、君の駒を殺して原作とはまた違う結果を見せてくれると僕は信じている」

「そーなるといいいな」

その言葉が部屋に反響したと同時に悪神は姿を消す。

「僕は君たちを信じているよ」

いきなりの窮地

景色が変わると綺麗な砂浜に俺と卯月は立っていた。

前を見るとエメラルドグリーン的大海が広がっており、海底までしっかり見えるほど綺麗だ。後ろを見れば広大なジャングルがあり木々が生い茂っている、そして変な猛獣の声もする。

少し意識をジャングルの方へと向ける。その中からは俺とは比べ物にならない程の強大な力を持った猛獣たちの気配がする。この気配を感じただけで体が震えてしまう。

ああ早く戦いたい。この強者たちと戦えば俺は何を感じられるのか？どの程度俺の力が通用するのか？俺はどのように成長するのか？全てを知りたい、ああ早く戦いたい。

「お兄ちゃん！きいてる!!」

意識をジャングルから戻すと横から卯月の声が響く、どーやらジャングルの方を意識しすぎて卯月の声に気づかなかったようだ。

「ねーねーお兄ちゃん！これ特典のやつかな？」

卯月が手に持っていたものを俺の方へと差し出しながら聞いてくる。その手に持っているものは空色の実で模様は至る所に十字がある、正直いつて気持ち悪い。もう一つはでんでん虫だ、こちらはワンピースでよく見かけたやつだな。

卯月は俺の表情を見ると察してくれたのか、食べなきゃーと呟いている。たしかにあれを食べるのは相当な勇氣がいる。

卯月がうーと唸りながら食べるのを躊躇しているとジャングルの方からすごい足音が聞こえてくる。

「バキバキツドガァー」

木をなぎ倒しながら姿を現したのは青色のゴリラだった、だがふつーのゴリラと違うのは色だけでなくその大きさも違った。

まだ少し遠く走ってくるゴリラを見ても大きさは大人の4人分くらいありそうだ。そんなのが迫っているとふつーは慌てるだろう今横で慌てている卯月のように。

「お兄ちゃん！どーしよーゴリラがあー」

卯月はいつの間にか悪魔の実を食べ俺の服を引っ張りながらゴリラを指さしている。ゴリラに驚いて悪魔の実のまずさ感じなかったのか？と俺はゴリラよりもそちらが気になってしょうがない。

ゴリラがあと10mという所まで迫ってきて俺は相対する。

俺はゴリラの前で地球で習っていた武術の構えをとる。だが決まった構えなどなかった俺の武術は自由な構えとなり素人から見ると「それが構えか？」となることをある。

そんな俺の構えは直立不動だ、ただ手を下にさげ足もいたってふつーに立っている。ただのヤンキーと喧嘩した時なんかは油断したまま近づいてきた程この構えは隙しかないように見える。

だがしっかりと戦えるものならわかるはずだ、俺はこの状態で反応ができる。なぜなら反射神経を特に極めているからだ。

俺の考えはこうだ、どんな行動も最初は遅い、1本目を踏み出すのも、パンチをするのも、蹴りをするのもまずためが必要だからだ。そのための間に反応し相手より先に行動すれば理論上俺は無敵だ。そんな考えから反射神経を極め俺はこの構えとる。

ゴリラのくせにそれを感じとったのかゆつくりと近づいてくるゴリラ、そんな中卯月がくしゃみをする。

その瞬間ゴリラは瞬間移動とも取れる速さでこちらに殴りかかってきた。地球にいた頃の俺なら反応も出来ずにただ殴られて死んでいただろう、だがこの世界へと適応するために作り替えられた体は身体能力が上がっていた。そのおかげで体はゴリラの攻撃に反応し、しつかりと避けることが出来ていた。

ゴリラ自身も避けられたことに驚きすこし反応が鈍る、俺はその隙をつき右手を前へ伸ばしているゴリラの懐に入り腹パンを食らわせる。俺のパンチはゴリラの鳩尾をしつかりと捉え決まっていたと俺は思った。だがゴリラには全く効いていなかった、身体能力が上がリパンチの力も上がっているはずなのに効かなかったと言う事実が重く俺にのしかかる。

そこから俺は反撃されないよう距離をとり思考を巡らせる。

ゴリラの攻撃や行動に反応し先手を取ることはできる、だが先手を

取った所で俺にできることがない、良くて逃げるくらいだ。

だが卯月を抱えて逃げるのはすぐに追いつかれる、なら卯月を置いて逃げるか？……それだけはありえない、俺が死のうと卯月は逃がす。

まず卯月の状況を確認しようとして卯月がいた場所へと視線を送る、そこには少し遠くに逃げている卯月の姿があった。俺の邪魔にならないよつ逃げてくれたらしい、すごく気が利く子だななんて考えていると横から風が吹く。

横に視線を向けるとそこにはゴリラがいた。俺が少し卯月の方へと視線を向けただけで死角をつかれてしまうとは俺も油断していたな。

と思っている頃には俺は殴り飛ばされていた。殴られ水平に5m程飛んで着地した。

俺はここで生きることが諦めた、生きることが諦め死を受け入れようとする俺に1人の声が聞こえてきた。

「お兄ちゃん!!」

卯月の声だった、俺がここで死ねば次に狙われるのは卯月だ。そんなことは許さない、俺は死んでもいい!だが卯月だけは守る。

せめて勝てなくても相打ちには、いや足の1本くらいは奪ってやる。

俺は起き上がりゴリラを睨みつける、するこゴリラが1歩後ずさった。

最後の力をふりしぼり俺は全力で前へと飛び右腕を振り抜いた。先程は通用しなかった俺のパンチがゴリラの顔面にあたりぶっ飛ばしたのだ。俺は着地と同時に倒れ込みながら3mほど飛ぶゴリラを確認する。結果は足の1本も奪えなかったが一矢報いた、これで卯月が少しでも逃げられれば。

「う、卯月……」

「君はとても興味深いな、あの少女のことは任せなさい」

倒れ込むを俺支えながらそう呟く白髪の眼鏡をかけしほい髭のおじさんがいた。俺はここで意識を失った。

レリー視点

私は日課の水泳をしているといつの間にかイーストブルーへと到着していた。さすがに離れすぎたかと引き返そうと思ったがいきなりイーストブルーにグラウンドラインにいてもおかしくないような強い気配が無数に現れる。そこを目指し泳いでいると1つの島が見えてきた。上陸し砂浜を歩いていると1人の少年と青色のゴリラが戦闘をしていた。すぐに助けようかと思ったが少年の構えを見ると少し興味が湧き観察することにした。そこそこのスピードで少年に迫るゴリラだが少年はそれに反応してみせた。さらに懐に入り込みパンチを決めるところまでして見せた、それには少し驚いたがその小さな体で出せる力ではパンチを当てても無駄だろう。

私の考えと同じようにゴリラにパンチは効いていなかった。そして距離をとる少年だが横にいた少女が気になったのか視線をゴリラから外してしまう。私の考えが正しければ彼の速さの正体は反射神経だろう、だが反射神経は見えていなければ意味が無いのだ。どれだけ反射神経がよかろうとも見えていない、感じれていないものでは避けることは出来ない。やはりと言うべきか少年はゴリラの1発で吹っ飛んでしまう。すぐに助けようと駆け出したが少年は立ち上がりゴリラに対して気迫を放った、あれは霸王色の覇気だ。驚いたなこんな所で見つけた少年があのかの力を持っているとは。そしてあの目はあいつにそっくりだ。

少年の覇気に気圧されたゴリラは後退りする。その隙に少年はゴリラの所へと瞬時に移動する。さすがの反射神経かゴリラが後退りし足をついた頃にはゴリラの前まで来ていた。

だが少年が殴ったところでゴリラには効かないと思っていた。

さらに驚くことに少年の右腕は武装色の覇気をまとい黒く変化していた。きつと自らの意思ではないだろう、この窮地が少年を覚醒させたのだ。

そのパンチは見事ゴリラに命中し少しだがぶっ飛ばす事にも最高した。だが体は限界だったのかその場で倒れ込む。

「う、卯月……」

「君はとても興味深いな、あの少女のことは任せなさい」

彼は氣を失った。ゴリラは私の覇王色の覇氣で氣絶させ、少年を担ぎ少女の所へと運ぶ。

この少年には興味が湧いた、少し修行でも付けてやろうかなと考えながら私は歩く。

修行をするかどーかは彼次第だがね。